

# 自分の手で心を育てよう

第46回(令和3年度)「小さな親切」作文コンクール 特別優秀賞

「気づかされた心」 北九州市立松ヶ江北小学校 4年 古賀 凛

「こないで、近よらないで。」

わたしは思わず、四才の妹に強くさげんてしまいました。妹が通っているようち園で、**コロナウイルスの陽せい者が出た**と連絡があったからです。妹はその日、のうこうせつしよく者になってしまいました。

わたしの家では、コロナウイルスにかからないように外食はせず、遊びに行くのもひかえ、とてもとても気をつけていたのに、「どうして、どうして」と、頭の中がぐちゃぐちゃになってしまいました。ハツとして妹の顔を見ると、とても悲しそうな顔をして、そっとわたしのそばからはなれました。

そのときのわたしは、**自分もコロナウイルスになるのではないかと**、こわくてたまりませんでした。家族全員にうつたらどうしよう、学校みんなに「**さわらないで、あっち行って**」と言われたらどうしようかと、不安でいっぱいでした。

ようち園でコロナウイルスが出なかったら、妹がのうこうせつしよく者にならなかったら、学校に行つて勉強したり、遊んだりできたはずだったのに、心の中でずっと思っていました。とにかく、**自分のことしか考**

えていなかったと思います。

だけど、小さな妹がわたしの言うことをきいて、近づいてこなかったり、少しはなれたところではんを食べているのを見て、**心がズキツ**といたくなってきました。

次の日、妹がPCRけんさをして帰つてくると、お母さんは、

「いたかったのに、よくがんばったね。」

と妹をだきしめていました。妹は、好きでこのうこうせつしよく者になつたわけじゃないのに、わたしは自分のことばかり考えて、ひどいことをたくさん言ってしまったことを、とてもこのうかいしました。

二日後、けんさけつかがわかりました。**けんさした全員がいんせいでした**。お母さんが、「だいじょうぶだったよ。」と言うと、妹は走つてきて、わたしにだきついてきました。

わたしは妹に、「**ごめんね。本当にごめんね**。」と何度もあやまって、ぎゅうつとだきしめかえました。

次の日、休んでいた学校にドキドキしながら行つて、不安な気持ちで教室に入ると、

「りんちゃん、待つたよ。」

と、友達がニコニコしながら言いました。だれひとり、「さわらないで、あっち行って」と言う人はいませんでした。わたしは、妹にあんなことを言ってしまった**自分が、本当にはずかしくてたまりませんでした**。

コロナウイルスになった人がいても、**決して差別してはいけない**、**コロナウイルスは差別する病気ではない**と強く思いました。そしてコロナウイルスはわたしに、自分の心、人の心を教えてくれました。

コロナ差別や偏見を防ぐため、今必要な思いやりという名の「心のワクチン」。私たちは、「心のワクチン」運動として、改めて親切や思いやりの大切さを考えてもらいたいと様々な情報発信を行っています。

今回はまず、こちらの作文をお読みください。この作文を元に、「小さな親切」作文コンクールの審査員で、長年道徳教育に携わる宮島盛隆先生(元小学校長)に、自分の心を育てる大切さをお話しいただきました。

## 心の弱さを見つめる

私は、作者の古賀さんが人間の「心の弱さ」を正直に書いている点を、高く評価しました。妹が濃厚接触者になったことで、自分や家族も感染しているかもしれない、感染者となれば、白い目で見られ、差別を受けるかもしれないという不安。

コロナ禍を過ごしている私たち誰もが、一度は感じたことのある不安でしょう。

しかし、感染症への過剰な不安や恐れから、不確かな情報を信じてしまい、コロナ差別や偏見が生まれているのも事実です。

古賀さんは、ひどい言葉で妹を傷つけてしまった自分の「心の弱さ」をしっかりと見つめました。そして、妹は好きで濃厚接触者になったわけではないのに、「自分のことしか考えていなかった」と反省します。また、学校を休んでいた自分を「待ってたよ」と温かく迎えてくれた友達と比べて、「自分が恥ずかしい」とも感じました。

誰もが、不安や恐怖に負けてしまう「心の弱さ」を持っています。しかし、古賀さんは自分の中にあるその弱さを認めたからこそ、それを克服するのは思いやりの心であり、それは「自分の心、人の心」の中にある、と気づくことができたのではないのでしょうか。

## 自分の心と対話する

私は、この作文を用いて道徳の授業を何度か行いました。相手の気持ちを自分のことのように想像するのは、思いやりの心を育む第一歩です。まずは、子どもたちに作者の気持ちをじっくり考えてもらいます。感染や差別・偏見への不安は、多くの子にとって身近なものであるだけに、古賀さんに共感する声が圧倒的でした。

道徳教育で一番大切なのは、「自己内対話」です。古賀さんは、最終的に「差別は決してしてはいけない」と綴っていますが、妹を傷つけてしまった後悔、友達の温かな態度や言葉から、自分の心と対話して生まれた重要な気づきです。まさに、「自分で自分の心を成長させた」といえるのではないのでしょうか。

\* \* \*

宮島先生の言葉を借りれば、作文は、文章力を鍛えるだけののではなく、体験を「心に刻む」こと。その時の想いを振り返り、心に刻むからこそ、心の成長の一助となるのです。当コンクールでは一貫して、子どもたちの繊細な心の動きの表現を評価してきましたが、自分の手で心を育てていく過程を描いた、古賀さんのような作文に出会えて嬉しく思います。

また、「心の成長」は子どもたちに限ったことではありません。コロナ禍や紛争、世界規模で社会不安が続いていますが、この状況に振り回されないよう、私たち大人も常に自分の心を育てていく意識が必要ではないかと痛感しました。